

歴代誌第二21-24章「ユダにまで及ぶバアル」

1A ユダの背教 21

1B アハブの娘との婚姻 1-10

2B 住民にさせる淫行 11-15

3B 不治の病 16-20

2A アハブ家の断ち切り 22

1B 北イスラエルへの協力 1-9

2B イゼベルの娘 10-12

3A 神の真実 23

1B 防備を固めた即位式 1-11

2B 悪の除去 12-21

4A 借り物の靈性 24

1B 損傷の修復 1-14

2B 預言者の殺害 15-22

3B 敗北と裏切り 23-27

本文

21章を開いてください。ヨシャパテの治世が終わりました。早速本文に入りたいと思います。

1A ユダの背教 21

1B アハブの娘との婚姻 1-10

21:1 ヨシャパテは彼の先祖たちとともに眠り、先祖たちとともにダビデの町に葬られた。その子ヨラムが代わって王となった。21:2 彼には、兄弟たちがいた。ヨシャパテの子たちで、アザルヤ、エヒエル、ゼカリヤ、アザルヤ、ミカエル、シェファテヤであった。これらはみな、ユダの王ヨシャパテの子たちであった。21:3 彼らの父は、彼らに銀、金、えりすぐりの品々など多くの賜わり物を与え、また、それとともにユダにある防備の町々を与えたが、王国はヨラムに与えた。彼は長男だったからである。21:4 ヨラムはその父の王国に立つと勢力を増し加え、その兄弟たちをひとり残らず剣にかけて殺し、また、イスラエルのつかさたちのうち幾人かを殺した。21:5 ヨラムは三十二歳で王となり、エルサレムで八年間、王であった。21:6 彼はアハブの家の者がしたように、イスラエルの王たちの道に歩んだ。アハブの娘が彼の妻であったからである。彼は主の目の前に悪を行なったが、21:7 主は、ダビデと結ばれた契約のゆえに、ダビデの家を滅ぼすことを望まなかった。主はダビデとその子孫にいつまでもとしびを与えようと、約束されたからである。

ヨシャパテの治世の後の王を四人見ていきます。一人は正統な王ではありませんが、ヨラム、その子アハズヤ、そしてアハズヤの母アタルヤ、そしてヨアシュです。この四人、特に先の三人はみな、アハブ家に組み込まれた者たちです。ヨシャパテが宗教改革を断行して、ユダの国が強くなり、豊かになり、そして敵からの攻撃もなく安息を持ちました。けれども、彼が行った悪いことが一つありました。そ

それは、彼が悪いことを行ったことではなく、悪者を愛したことです。彼自身は悪いことをしていないのですが、悪いことをしている者と交わることはいかに悪いことなのかを、今日学ぶところで嫌と言うほど知ります。

ヨシャパテは、アハブのところに行き、そして仲よくしました。同じイスラエル人ですから一つになることは、人間的に見たら悪いことではありません。むしろ喜ばれることかもしれません。けれども、悪は悪として憎むのです。使徒パウロはエペソの教会に、「実を結ばない暗やみのわざに仲間入りしないで、むしろ、それを明るみに出さない。(5:11)」と言いました。明るみに出すところまで、しっかりと光の中に生きるのです。接して愛していくことと、交わることは意味が違います。イエス様は、「わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて、悔い改めさせるために来たのです。(ルカ 5:32)」と言われました。罪人と交わっているというそしりをイエス様は受けられましたが、イエス様が罪を犯すのではなく、罪人が悔い改めたのです。けれども、交わることは自分自身がその悪の影響を受けることです。

宣教するには、本人が弟子になっていなければいけません。弟子になっているのは、自分自身を否む生活が確立されている必要があります。ですから救いと霊的成長は、まず群集である自分から、イエスに従う弟子になること。そして弟子になることから、イエス様に遣わされて宣教者となることです。宣教をする者はその世に入っていきます。その中に住みます。けれども、その中に住むことによって自分からキリストが現れることを願うのです。

そこでヨシャパテについては、前回学んだとおり、彼自身は、問題は全くありませんでした。アハブのところに行っても、ラモテ・ギルアデにいっしょにいて戦う時に、神の御心を求める預言者がいないのかと尋ねました。彼が戦いの中で殺されそうになった時、主に助けを求めました。けれども、ヨシャパテの息子はもろに悪い影響を受けたのです。ヨラムの妻は、アハブの娘アタルヤだったのです。かつ伊イゼベルの娘です。アハブがイゼベルをシドンから迎え入れ、それでバアル信仰がイスラエルに入り込んだのと同じように、ユダの国にバアルが入り込んだのです。

覚えていますが、イゼベルは主の預言者を殺害しました。偶像礼拝を推進しただけでなく、主に属する者たち、主の預言者たちを迫害し、抹殺しようとしたのです。イゼベルにそそのかされたアハブは、神につく人々を殺していくという悪を行ないました。これを背教と言います。表向きは敬虔を装っているのですが、悪を行い、悪を行うだけでなく、主を否定するようなことまでも行うのです。このことをヨラムが行いました。ヨシャパテは、かつてレハブアムが行ったように(11:23 参照)、ヨラムが長男で彼が後継者なのですが、他の息子たちが不満を持たないように町々を与えて、富も与えていました。ところが、ヨラムは彼らを殺してしまいます。そしてイスラエルの王たちが行ったこと、すなわちバアル信仰を行い始めました。

したがって、自分だけが正しいことをしていればよい、のではありません。自分が信者の模範になっているかどうか気をつけるべきです。ヨシャパテの場合のように、親は子に対して気をつけなければいけません。そうでなければ、ある行動をして、自分は大丈夫でも、つまずいてその影響を受けて悪に傾くことは十分にあり得ることなのです。

そして、アハブの家と異なるのは、神のダビデ家に対する恵みです。7 節に、ダビデと結ばれた契約のゆえに、ダビデ家を滅ぼすことを望まなかった、とあります。これからアハブの悪がユダの王家に猛威を振るうのを見ますが、なんとか生き延びる姿を見ます。それは、幸運だったということではなく、主がダビデに恵みを示されたから、その契約を重んじて滅びることのないようにされたのです。私たちが、幸運という言葉を使ってはいけませんね。神の恵みがあって、危険も罠も避けられているのです。

21:8 ヨラムの時代に、エドムがそむいて、ユダの支配から脱し、自分たちの上に王を立てた。21:9 ヨラムは、彼のつかさたちとともに、すべての戦車を率いて渡って行き、夜襲を試み、彼を包囲していたエドムと戦車隊長たちを打った。21:10 しかしなお、エドムはそむいて、ユダの支配から脱した。今日もそうである。リブナもまた、その時にそむいて、その支配から脱しようとした。これは彼がその父祖の神、主を捨て去ったからである。

ダビデの時代に周囲の諸国との戦いはやみました。けれども、ソロモンの晩年に逆らい始めます。そしてアサの時代、ヨシャパテの時代も安息がありましたが、それはあくまでも神が守っておられたからです。しかし、神はその守りを取り外し始めました。まず争ったのがエドムです。自分たちの武力で鎮圧できると思っても、その反逆の性質は霊的なものだったのです。私たちが何か問題を起こる時に、それは自分たちで何とかできると思っている時は、まだ目が覚めていません。目を覚まして、これは霊的なことであると悟って、いつ祈り始めることができるのが大事です。

2B 住民にさせる淫行 11-15

21:11 そのうえ、彼はユダの山々に高き所を造り、エルサレムの住民に淫行を行なわせ、ユダを迷わせた。21:12 ときに、預言者エリヤのもとから彼のところに書状が届いたが、そこには次のようにしるされていた。「あなたの父ダビデの神、主は、こう仰せられます。『あなたが、あなたの父ヨシャパテの道にも、ユダの王アサの道にも歩まず、21:13 イスラエルの王たちの道に歩み、アハブの家が淫行を行なわせたように、ユダとエルサレムの住民に淫行を行なわせたので、また、そればかりでなく、あなたは、自分よりも善良なあなたの兄弟たち、あなたの父の家の者を殺したので、21:14 見よ、主は大きな災害をもってあなたの民、あなたの子たち、あなたの妻たち、あなたの全財産を打つ。21:15 あなた自身は、内臓の病気で大病をわずらい、日々にその病が進んで、内臓が外に出るまでになる。』」

ヨラムの悪は、自分が淫行を行なったということだけでありません。ユダの民とエルサレムの住民に淫行を行わせたことがあります。つまり、人をつまずかせたということです。イエス様は、つまずきを与えることについて大変厳しい言葉を残しておられます。「また、わたしを信じるこの小さい者たちのひとりにもつまずきを与えるような者は、むしろ大きい石臼を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれたほうがましです。(マルコ 9:42)」自分の生活そして人生が、またその言葉が、人をキリストに導くようなものになっていますか？それとも、キリストから離れるようなものになっていますか？

そして驚きなのは、ヨラムに対してあの預言者エリヤが手紙を送っていることです。エリヤは、アハブの子アハズヤが活着している時まで預言していたことが第二列王記1章に書かれています。ですから、もしかしたらまだ地上にいたのかもしれませんが。あるいは、すでに火の戦車で天に引き上げられただけ

れども、その前にこれから起こることを神にすでに知らされていて、ヨラムに対して手紙を残していたのかもしれませんが。いずれにしても、かつてエリヤがアハブ家に対して預言したのと似たような、家全体への裁きが宣言されています。

3B 不治の病 16-20

21:16 主はクシュ人の近くにいたペリシテ人とアラビヤ人の霊を奮い立たせて、ヨラムに敵対させられたので、21:17 彼らは、ユダに上って攻め入り、王宮の中で目に留まったすべての財産と彼の子や妻たちを奪い去った。その結果、彼には末子のエホアハズのほか、男の子はだれも残らなかった。

エリヤが預言した通りになりました。けれども、ダビデへの約束にしたがって、一人の男の子を残し、神は根絶やしにすることはありませんでした。

21:18 これらすべてのことの後、主は彼を、その内臓を打たれた。彼は不治の病になった。21:19 年は巡り、二年の終わりが来ると、彼の内臓は病のために外に出てしまい、ついに彼は重病の床で死んだ。彼の民は、彼の父祖たちのために香をたいたようには、彼のために香をたかなかった。21:20 彼は三十二歳で王となり、エルサレムで八年間、王であった。彼は人々に愛されることなく世を去った。人々は彼をダビデの町に葬ったが、王たちの墓には納めなかった。

愛されることがなかった、香をたかれることはなかった、とあります。これも、イゼベルが死んだ時に似ていますが、彼女はエファーを窓から眺めていた時、そばにいた人々が彼女を突き落して、死にました。イゼベルのことを憎んでいたのだと思われます。そしてヨラムだけでなく、次のアハズヤも、そしてヨアシムも、敬われずに葬られる姿を見ます。

思い出せば、イスカリオテのユダがそうでした。彼は首をつって死に、そして体が外れて落ちたのでしょう、地面に落ちて体が真っ二つに裂けて、はらわたが全部飛び出してしまいました(使徒 1:18)。主に背信するときの悲慘は、いつでも変わりません。

2A アハブ家の断ち切り 22

1B 北イスラエルへの協力 1-9

22:1 エルサレムの住民は、彼の末子アハズヤを彼の代わりに王とした。アラビヤ人とともに陣営に攻めて来た略奪隊が年長の子らを全部殺してしまったからである。こうして、ユダの王ヨラムの子アハズヤが王となった。22:2 アハズヤは四十二歳で王となり、エルサレムで一年間、王であった。彼の母の名はアタルヤといい、オムリの孫娘であった。22:3 彼もまた、アハブの家の道に歩んだ。彼の母が彼の助言者で、悪を行なわせたからである。

末の子はエホアハズとありましたが、同一人物です。アハズヤが末の子でヨラムが残した子で生き残りでした。そして先ほど話したように、ヨラムの妻アタルヤがダビデの家を支配していました。夫だけでなく息子にもその悪い影響をしっかりと与え続けたのです。

そして彼の歳が 42 歳となっていますが、列王記第二では 22 歳となっています。父ヨラムは 40 歳で死んでいるので、列王記第二の 22 歳が正しいのでしょう。聖書は、その原本において誤りがないと私は信じています。写本の時に間違いはあり得ます。

22:4 彼はアハブの家にならって主の目の前に悪を行なった。その父の死後、彼らが助言者となって、彼を滅びに至らせたのである。22:5 彼はこの人々の助言を重んじて行動し、イスラエルの王アハブの子ヨラムとともに、アラムの王ハザエルと戦うため、ラモテ・ギルアデに行ったが、アラム人はヨラムに傷を負わせた。

アハブの家の者たちが、アハズヤの助言者となっていました。そして、かつて祖父ヨシャパテが行った過ちを再び繰り返すこととなります。北イスラエルと共にアラム(シリア)人と戦って、ラモテ・ギルアデを奪還することです。けれども、これが彼の命取りとなりました。その戦いでは死にませんが、主に立てられた器によって殺されます。

22:6 彼は、アラムの王ハザエルと戦ったときにラマで負わされた傷をいやすため、イズレエルに帰って来た。ユダの王ヨラムの子アハズヤは、アハブの子ヨラムが病気であったので、彼を見舞いにイズレエルに下って行った。22:7 ヨラムのもとに行くことによって、アハズヤが滅びたのは、神から出たことであった。彼はそこに着くと、ヨラムとともにニムシの子エフーに向かって出て行った。これは、主がアハブの家を断ち滅ぼすために油をそそがれた人である。22:8 エフーは、アハブの家にさばきを行なったとき、アハズヤに仕えていたユダのつかさたちと、アハズヤの兄弟たちの子らとを見つけたので、これらの人々を殺した。22:9 彼がアハズヤを捜したので、人々は彼を捕えた。彼はサマリヤに身を隠していたのである。こうして、人々は、彼をエフーのもとに引いて来て殺したが、これは心を尽くして主を求めたヨシャパテの子であると言って、彼を葬った。アハズヤの家は王国を治める力を失った。

エフーはあくまでも、アハブ家を滅ぼすために主に用いられた器でした。しかし、アハズヤがすでにアハブ家の者になっていました。だから、彼は殺されたのです。彼はアハブ家に属するようになったので、それでアハブ家と共に滅ぼされたのです。ヨシャパテの子であるからと言って、しかばねを外に晒すことはなく、列王記第二 9 章を読みますと、エルサレムで葬られています。

ここで大事ななのは、彼は世と共に滅んだ型であります。信者であれば、神から懲らしめを受けることがあっても、世と共に滅びることはありません。「しかし、私たちがさばかれるのは、主によって懲らしめられるのであって、それは、私たちが、この世とともに罪に定められることのないためです。(1コリント 11:32)」しかし、世と共に滅びることは可能です。信仰から離れば、世と共に滅びます。テモテ第一 4 章 1 節に、「しかし、御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは惑わず霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。」とあります。惑わず霊と悪霊の教えというものが、終わりの時代になるとあります。それによって、信仰から離れるということが起こります。テサロニケ人への手紙第二 2 章 3 節には、不法の人が現れる前に「まず背教が起こり」とあります。

したがって、信じていると言っていて、教会にも通っていないが、信仰から離れ、いや信じているよう

に装っていながら、全く異なる内容のものを信じて、主を否むことはありえます。ですから、私たちがいつも、何を信じているのか、主イエス・キリストとこの方のなされたことのみを望みとしているのかどうか、いつも自分の信仰を吟味し、確かめていかねばなりません。

2B イゼベルの娘 10-12

22:10 アハズヤの母アタルヤは、自分の子が死んだと知ると、ただちにユダの家に属する王の一族をことごとく滅ぼした。22:11 しかし、王の娘エホシェバが、殺される王の子たちの中から、アハズヤの子ヨアシュを盗み出し、彼とそのうばとを寝具をしまう小部屋に入れた。こうして、ヨラムの王の娘、祭司エホヤダの妻、エホシェバは、..彼女がアハズヤの妹であったので..ヨアシュをアタルヤから隠した。アタルヤはこの子を殺さなかった。22:12 こうして、彼はこの人々とともに、神の宮に六年の間、身を隠していた。その間、アタルヤがこの国の王であった。

なんと恐ろしいことでしょうか、さすがイゼベルの娘、悪女です。彼女の背後には悪魔がいます。ダビデの世継ぎの子としてキリストがこの世に与えられます。その神の約束を反故にしようとする、悪魔の働きが、王の一族の抹殺へとアタルヤを突き動かしています。神の約束を無いものにしようとする働きは、いつも悪魔の仕業です。パウロがテサロニケ人への手紙第一で、「誘惑者があなたがたを誘惑して、私たちの労苦がむだになるようなことがあってはいけないと思って、あなたがたの信仰を知るために、彼(テモテ)を遣わしたのです。(3:5)」とあります。信じようとしているのにそれを妨げること、信じたのにその種を摘み取ってしまおうとすること、こうしたものはみな悪魔の働きです。

しかし、主は悪魔よりも圧倒的に偉大な方であり、偉大であるだけでなく、完全に掌握しておられます。ここで主は、エホシェバを用いられました。彼女は興味深い人です。ヨラム王の娘として生まれたのに、祭司エホヤダの妻になりました。王族であり、祭司職を務めるレビ系の者の妻になりました。私はここに、メシヤ的なものを感じます。王の子であるのに、神の祭司となられる方です。メルキデゼクのような方であります。王でありながら、祭司の務めを執り行われます。そしてその子、ヨアシュは神の宮の中にいながら、王の子として現れる時を待つことになります。

3A 神の真実 23

1B 防備を固めた即位式 1-11

23:1 その第七年目に、エホヤダは奮い立って、エロハムの子アザルヤ、ヨハナンの子イシュマエル、オベデの子アザルヤ、アダヤの子マアセヤ、ジクリの子エリシャファテなど、百人隊の長たちを連れて来て、彼と契約を結ばせた。23:2 それで彼らはユダを巡回し、ユダのすべての町々からレビ人を集め、イスラエルの一族のかしらたちを集めたので、彼らはエルサレムに来た。23:3 こうして、全集団が神の宮で王と契約を結んだ。そのとき、彼はこう言った。「ご覧のとおり、主がダビデの子孫について約束されたように、王の子が王となるのです。

契約を結ばせたとありますが、それは王の子がいることを口外しない、この子を王とするという忠誠の誓いことです。近くにいる護衛の兵士たちにまず契約を結び、そして次に大事なものはレビ人です。王は主の律法を守り、神の宮で礼拝しなければいけません。そして、各部族のかしらたちが集まりまし

た。そしてエホヤダは、大切なことを話します。主がダビデの子孫に約束されたこと、王の子が王となることを思い起こさせました。

どこにおいてもそうですが、主が命じられたことではないことを行うことは、いかに良く見えても神の権威に反逆することであり、神ご自身を否定することです。アタルヤは王の子ではもちろんないわけですから、彼女はどんなに支配力を強めようとも越権行為なわけです。ここの王政とキリストの教会の秩序はもちろん違います。けれども、パウロは「私は、女が教えたり男を支配したりすることを許しませ遠。ただ、静かにしていなさい。(1テモテ2:12)」と言いました。女牧師というのは、ふさわしくないのではないかと私は思います。女性も主に用いられ、預言を行っている人たちも聖書にはたくさん出てきますが、全体の秩序として、大まかな順番としてやはり神は男を指導者に立てています。

23:4 あなたがたのなすべきことはこうです。あなたがた、祭司、レビ人の三分の一は安息日に勤務し、入口にいる門衛となる。23:5 三分の一は王宮におり、他の三分の一は礎の門にいる。すべての民は主の宮の庭にいる。23:6 祭司と、レビ人で仕えている者たちは聖であるから、はいってもよいが、それ以外の者は、主の宮には行ってはならない。すべての民は主の戒めを守らなければならない。23:7 レビ人は、おのおの武器を手にし、王の回りを取り囲みなさい。宮には行って来る者は殺されなければならない。あなたがたは、王がはいるときにも、出るときにも、いつも王とともにいなさい。」

王を即位させる時に、祭司とレビ人がしっかりと王を守り、また主の宮を守ります。それは、民が誤って入ってくることをないようにするためであります。もう一つ、アタルヤが主の宮に入る時に彼女を取り除くことができるようにすることです。彼女は、この宮でバアル信仰を実践していたのですから、神からの裁きは当然のごとくあってしかるべきです。

23:8 レビ人およびすべてのユダの人々は、すべて祭司エホヤダが命じたとおりに行なった。おのおの自分の部下、すなわち安息日に勤務する者、安息日に勤務しない者を率いていた。祭司エホヤダが各組の任を解かなかったからである。23:9 祭司エホヤダは百人隊長たちに、神の宮にあったダビデ王の槍、盾、および丸い小盾を与えた。23:10 彼はすべての民にひとりひとり手に投げ槍を持たせて、神殿の右側から神殿の左側まで、祭壇と神殿に向かって王の回りに立たせた。23:11 こうして彼らは、王の子を連れ出し、彼に王冠をかぶらせ、さとの書を渡して、彼を王と宣言した。そしてエホヤダとその子たちが彼に油をそそぎ、「王さま。ばんざい。」と叫んだ。

祭司とレビ人は宮の中の警備ですが、その周りは一般の兵士が行うようエホヤダが準備させました。そして、一般の民にも神殿の庭で武器を持たせています。そして宮から出てきた七歳の子を、王様として受け入れ、歓喜し、即位させたのです。まるでこれは、イエス様が大祭司として神の右の座に着いておられるけれども、地上に戻ってきて王の王、主の主として現れ、天の軍勢と共に現れることを思い出します。

2B 悪の除去 12-21

23:12 アタルヤは、王をほめたたえている民と近衛兵の声を聞いて、主の宮の民のところに行った。
23:13 見ると、なんと、王が入口の柱のそばに立っていた。王のかたわらに、隊長たちやラツパ手たちがいた。一般の人々がみな喜んでラツパを吹き鳴らしており、歌うたいたちが楽器を手にし、賛美の拍子をとっていた。アタルヤは自分の衣服を引き裂き、「謀反だ。謀反だ。」と言った。23:14 すると、祭司エホヤダは、部隊をゆだねられた百人隊の長たちを呼び出して、彼らに言った。「この女を列の間から連れ出せ。この女に従って来る者は剣で殺されなければならない。」祭司が「この女を主の宮で殺してはならない。」と言ったからである。23:15 彼らは彼女を取り押え、彼女が馬の門の出入口を通過して、王宮に着いたとき、そこで彼女を殺した。

「謀反だ。謀反だ。」と騒いでいますが、越権行為をし続けたのは彼女アタルヤ自身です。これが、イエス様の再臨の時も起こります。悪魔がこの世の神として猛威を振るっていましたが、まことの神であり主であるイエス様が来られる時に、悪魔が鎖にしばられ、後にゲヘナの池に投げ込まれるのです。

23:16 エホヤダは、彼とすべての民と王との間で、主の民となるという契約を結んだ。23:17 民はみなバアルの宮に行って、それを取りこわし、その祭壇とその像を打ち砕き、バアルの祭司マタンを祭壇の前で殺した。23:18 エホヤダは、主の宮の管理を定めて、これをレビ人の祭司の手にゆだねた。彼らは、モーセの律法にしるされているとおり、ダビデの指示に基づいて、喜びと歌とをもって主の全焼のいけにえをささげさせるようにと、ダビデが組分けをして主の宮に配属した人々である。23:19 さらに、彼は主の宮の門に、門衛たちを立て、どんなことで汚れた者であっても、だれひとりはいり込ませないようにした。23:20 彼は百人隊の長たち、貴人たち、民の支配者たちとすべての一般の人々を率いて、王を主の宮から連れ下った。彼らは上の門をくぐって王宮にはいり、王を王国の王座に着かせた。

すばらしいです、ついにユダに神の秩序が戻りました。王の即位は一般の民にとって寝耳に水だったでしょうが、けれども彼らも喜んで彼を迎え入れました。ここで大事なことは、王が王宮で王座に着いたのは、本当に最後の最後だ、ということです。その前にしたことは、「主の民になる契約を結んだ」ということです。その次にしたことは、主の宮の管理です。そして王宮で王座に着きました。

主の民になる契約というのはどういう内容なのでしょう？もちろん、これまでの神がイスラエルに立てられた契約であろうと思われまます。アブラハムへの契約もありましたが、主にモーセに対する契約でしょう。だから、他の神々をことごとく打ち壊す行為を契約を再履行した後で初めに行ったことです。けれども、霊的には「神の民になる」とはどういうことでしょうか？第一に、主が自分の生活の中で第一になっていることです。他のものが楽しいですか、それとも主ご自身を喜びにしていますか？優先順位において主が一番上になっていますか？第二に、神の御心が成ることを願う、ということです。自分の願いではなく、主の御心になることを願います。今は自分の願いがかなえられることを求める時代に生きています。だから、都合の良いことを話してもらうために好き勝手に教師を集め、真理からそれる時代になるとパウロは警告しました。そして第三に、主を心から愛して、その命令を守ることです。聖なる者となれ、と主は命じておられますから、主を愛するがゆえにそれに従います。憎たらしい人がいて

も、主が命じられているのだからということで、その人を赦し、愛します。

そして次に宮の管理ですが、ダビデがレビ人に言い付けたことを実行しています。歌うたいの奉仕、そして門衛がダビデの定めたおきて、として特徴的です。賛美、そして汚れた者が入らないようにする努力はとても大切です。

23:21 一般の人々はみな喜び、この町は平穏であった。彼らはアタルヤを剣にかけて殺したからである。

アタルヤこそが、ユダの民から平穏を奪い取っていた張本人でした。今はなくなったので、みな喜んでいます。終わりの日の大淫婦、大バビロンもそれが滅ぼされた時に、天においては大歓声がありました。この世の制度のせいで、真実に主を求めたい人は迫害を受け、時に殉教します。けれども、それが滅べば、そこにあるのは平安であり、平和です。

4A 借り物の霊性 24

1B 損傷の修復 1-14

24:1 ヨアシュは七歳で王となり、エルサレムで四十年間、王であった。彼の母の名はツイブヤといい、ベエル・シェバの出であった。

四十年とはかなり長い統治です。しばらくの間、ユダは霊的に復興し、安定していました。

24:2 ヨアシュは、祭司エホヤダの生きている間は、主の目にかなうことを行なった。24:3 エホヤダは、彼のためにふたりの妻をめぐらせた。彼は息子たちと娘たちを生んだ。

ヨアシュはまだ幼いですから、エホヤダが実質上治めていました。彼は二人だけの妻を彼に与えました。モーセの律法に多くの妻を与えてはならないとありましたが、これはかなり質素な王としての生活であろうと思われます。そしてここで、非常に気になる言葉は、「エホヤダの生きている間は」という但し書きがあることです。その懸念が実際のものとなります。

24:4 その後のことであるが、ヨアシュは主の宮を新しくすることを志し、24:5 祭司とレビ人を集めて、彼らに言った。「ユダの町々へ出て行き、毎年あなたがたの神の宮を修理するために、全イスラエルから金を集めて来なさい。あなたがたは急いでそのことをしなければならない。」ところが、レビ人は急がなかった。24:6 それで、王はかしらエホヤダを呼んで彼に言った。「なぜ、あなたはレビ人に要求して、主のしもべモーセとイスラエルの集団の、あかしの天幕のための税金を、ユダとエルサレムから持って来させないのですか。」24:7 というのは、あの悪女アタルヤ、その子たちが、神の宮を打ちこわし、主の宮の聖なるものをすべてバアルのために用いたからである。

これは、かなり後のことであろうと考えられます。二十年ぐらい経っているのではないのでしょうか？この時のヨアシュは、立派に成長しています。アタルヤの悪い影響から完全に回復したかったという強

い願いが、7節に書いてあります。バアルに用いられた痕跡を、神の宮からなくしたいと思いました。また主に対しての心からの礼拝を捧げるのに、その中身を良くしたいと願いました。実にその願いは、霊的な父エホヤダに対して叱責をしているほどです。

24:8 王は命令した。すると、彼らは一つの箱を作り、それを主の宮の門の外側に置いた。24:9 そして、神のしもべモーセが荒野でイスラエルに課した税金を主のみもとに持って来るように、ユダとエルサレムに布告した。24:10 すると、すべてのつかさたち、すべての民が喜んで、それを持って来て、箱に投げ入れ、ついにいっぱいにした。24:11 金が多くなったのを見て、レビ人たちが箱を王の役所に運んで行ったとき、王の書記と祭司のかしらに仕える管理人が来て、箱をからにし、それを持ち上げ、もとの場所に返した。彼らは毎日このように行ない、多くの金を集めた。24:12 そこで、王とエホヤダは、これを主の宮の奉仕の仕事を行なう者に渡した。彼らは、主の宮を新しくするために石切り工と木工を、主の宮を修理するために鉄と青銅の細工師を雇った。24:13 こうして、仕事をする人々は仕事をし、彼らの手によって、細工物の修復がされた。彼らは、神の宮を元のとおり建て、これを堅固にした。24:14 彼らは、完工の際、残った金を王とエホヤダの前に持って来た。彼らは、それで、主の宮の器具、すなわち、ささげる務めに用いる用具、深皿、金銀の器などを作った。こうして、人々はエホヤダの生きている間、絶えず、主の宮で全焼のいけにえをささげた。

民の進んだ捧げ物はすばらしいです。聖書に出てくる捧げ物は、いつも進んで行くこと、喜んで行くものです。モーセの幕屋の時は、ありあまる奉仕だといって、持ってくるのをやめさせたほどです。ここでも、一日で箱が金でいっぱいになるほど、民は宮の修繕を喜んでいたことになります。

そして、また意味ありげな言葉、「エホヤダの生きている間、絶えず、主の宮で全焼のいけにえをささげた」とあります。けれども、かなり長いこと全焼のいけにえを捧げるという、霊的に安定した、成熟した国民生活があったのではないかと思います。

2B 預言者の殺害 15-22

24:15 さて、エホヤダは老年を迎え、長寿を全うして死んだ。彼は死んだとき、百三十歳であった。24:16 人々は彼をダビデの町に王たちと一しょに葬った。彼がイスラエルにあって、神とその宮とに対して良いことを行なったからである。

なんと百三十歳まで生きました。主がこれだけ偉大な霊的指導を彼に与えてくださいました。そして、彼の霊的遺産はあまりにも偉大です。王たちと同じところに葬られています。私は、この箇所を読んでチャック・スミス牧師のことを思います。あまりにも大きな霊的遺産を彼は残しました。それゆえ、次の言葉は大きな警告となるのです。

24:17 エホヤダが死んで後、ユダのつかさたちが来て、王を伏し拝んだ。それで、王は彼らの言うことを聞き入れた。24:18 彼らはその父祖の神、主の宮を捨て、アシェラと偶像に仕えたので、彼らのこの罪過のため、御怒りがユダとエルサレムの上を下った。

主の宮を捨てて、アシェラと偶像に仕えたのは、ユダのつかさたちでした。王はそれを後追っています。けれども、王自身の信仰が実はこのようなものでした。エホヤダのいた時は、神の影響下に自らいましたが、ただそれがユダのつかさたちの影響下に移っただけです。自分自身が神につながっているという決断を、していなかったということになります。

これは多くの人に起こることです。霊的な人、霊の指導者の影響にいる時は主に仕えています、ひとたびいなくなると、この世の影響、あるいは世的な人々の要求をそのまま受け入れて生きていきます。ヨシュアが、「私と私の家とは主に従う」といった言葉ではなく、「あなたたちがそちらに行くのなら、私もいっしょに行きますよ。」というような態度です。これが致命的でした。

私たちは、たとえ自分にとって不都合でも、聖書に書かれている、神の願われている原則に自らを合わせる決断をしたでしょうか？それとも、周りの人たちがたまたま良いクリスチャンで、その人たちにいるから霊的な人のようにふるまえていることができているのでしょうか？自分の心の中で、「たとえ誰もいなくても、私は主に従う」と決める必要があります。

24:19 主は、彼らを主に立ち返らせようと預言者たちを彼らの中に遣わし、預言者たちは彼らを戒めたが、彼らは耳を貸さなかった。24:20 神の霊が祭司エホヤダの子ゼカリヤを捕えたので、彼は民よりも高い所に立って、彼らにこう言った。「神はこう仰せられる。『あなたがたは、なぜ、主の命令を犯して、繁栄を取り逃がすのか。』あなたがたが主を捨てたので、主もあなたがたを捨てられた。」24:21 ところが、彼らは彼に対して陰謀を企て、主の宮の庭で、王の命令により、彼を石で打ち殺した。24:22 ヨアシュ王は、ゼカリヤの父エホヤダが自分に尽くしてくれたまことを心に留めず、かえってその子を殺した。その子は死ぬとき、「主がご覧になり、言い開きを求められるように。」と言った。

主は、一度に彼を裁くことをなさいませんでした。預言者たちを遣わして、ヨアシュを立ち返らせようとなりました。けれども耳を貸しません。そこで、神はエホヤダの子ゼカリヤを立たせました。そして語ったところ、なんとユダのつかさたちは彼を殺そうと陰謀し、王もそそのかし、彼を石で打ち殺したのです。

興味深いことに、イエス様がご自身を殺そうとしている宗教指導者に対して、この言葉を残されました。「それは、義人アベルの血からこのかた、神殿と祭壇との間で殺されたバラキヤの子ザカリヤの血に至るまで、地上で流されるすべての正しい血の報復があなたがたの上に来るためです。(マタイ 23:35)」義人、神の義を信仰によって得た最初の人アベルでした。そしてユダヤ人の聖書では、その最後の書物が歴代誌です。したがって、ザカリヤがここに出てくるのは最初から最後まで、あなたがたは義人に対して流血の罪を犯してきた、ということでもあります。

そして興味深いのは、預言者が次々と遣わされて、最後にエホヤダの子が遣わされたというのも、イエス様に似ているのです。預言者たちが遣わされたが彼らは拒み、ついに神の息子を遣わしたけれども、受け入れるどころか殺してしまった、という話であります。

そして、ゼカリヤが最後に行った言葉、「主がご覧になり、言い開きを求められるように。」の言葉通

りに、次の出来事が起こります。

3B 敗北と裏切り 23-27

24:23 その年の改まるころ、アラムの軍勢が彼に向かって攻め上り、ユダとエルサレムに来て、民の中の、民のつかさをひとり残らず殺し、分捕り物を全部、ダマスコの王のもとに送った。24:24 アラムの軍勢は少人数で来たが、主が、非常に大きな軍勢を彼らの手に渡されたからである。それは、この人々がその父祖の神、主を捨てたからである。彼らはヨアシュを裁判にかけた。24:25 彼らが重病の状態にあるヨアシュを捨てて、離れて行ったとき、彼の家来たちは、祭司エホヤダの子たちの血のために、彼に謀反を企てた。彼らは、病床で彼を殺し、彼が死んだので、彼をダビデの町に葬ったが、王たちの墓には葬らなかった。

主が共におられれば、小さな軍勢でも、大きな軍勢に立ち向かうことができますが、その反対のことを主は行われました。相手が少人数だったのに、大人数である自分たちが破れたのです。そして悲惨なのは、自分の家来によって暗殺されたことです。自分が種を蒔いたことが、自分で刈り取っています。そして見てください、王たちの墓には葬ってもらえませんでした。これだけ良いことをしていたのですが、民はエホヤダをないがしろにしたことは到底尊敬できないとみなしていたのでしょう。

24:26 彼に謀反を企てたのは次の者たちである。アモンの女シムアテの子ザバデ、モアブの女シムリテの子エホザバデ。24:27 彼の子たちのこと、彼について述べられた多くの預言のこと、神の宮の再建のことなどは、王たちの書の注解にまさしくしるされている。ついで彼の子アマツヤが代わって王となった。

謀反を企てたのは、反逆の精神を持っている者たちだったのでしょう。純粋なイスラエル人ではなく、それぞれアモン人の女、モアブ人の女を母として持っていました。そして最後に、彼らのことについて、王たちの書の注解にしるされているとありますが、もしかしたら列王記のことかもしれません。

私たちは、どこまで主に対して心を開いたことでしょうか？ 雰囲気が良いからであったならば、私たちは真剣に主を追い求めなければいけません。せつかくエホヤダによってバアル信仰が取り除かれたのに、再びアシェラ像によって戻ってきてしまったのです。私たちの努力と忍耐はこれからも続きます。